

●研究概要

■本研究の目的

今回申請の研究は2006年から2008年の三年間の研究「映画の多元的解釈のための基礎研究」の成果として公表された論文のうちアメリカ領域に関するものを改めて調査・研究・検証し、学術の面で、教育の面で、より充実したものにし、前回の企画において、考慮・検討されていたものの取り上げることが出来なかった映像作品（芸術映画・記録映画）を5～6本研究の対象にし、一冊の本の形でその成果を改めて世に問う。映画を扱ったものは多くあるが、多くは娯楽、紹介、広報の域を超えるものではなかった。企画しているものはアメリカを「映画」を素材にして、その政治、経済、社会、文化、文学、安全保障(軍事)などを多角的に、多面的に、重層的に取り上げ、アメリカ研究の統合化(integration)を目指す。この点にこの研究企画の意義を認めたい。

映画のみならず想像芸術（音楽・絵画など）はこれまで高等教育機関のカリキュラムでは余り取り上げられることはなかった。これらは単に娯楽に止まらず、学問的にその価値・意義は高く評価されている。実際そのような理解で、例えば責任者・宮川佳三は過去数年間、自主企画として「映画上映会」を行い、自身の講義の副教材として、年間15～6本の映画を学内上映してきた。

先回の研究では日本、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、ラテン・アメリカと幅広く領域を横断して映画が取り上げられ、分析・解釈・評価され、12本の論文を収録した『映画の多元的解釈のための基礎研究』が報告書として公刊された(2009年3月)。

今回は上ですでに述べたように、アメリカ研究に特化し、「映画の中のアメリカ」、「映画から学ぶアメリカ」とでも言った形で、「映画」を通してアメリカを多角的に学び、理解するモデルを示すことを目的として、企画を進める。

幸いにも、本学において、特に英米学科に籍を置く教員の中にアメリカ研究に従事し、「映画」を研究の、教育の資料として意識的に取り上げている者が多くいる。こうした人的資源を有効に動員し、これまでのディシプリンを越えたアメリカ研究の統合化・総合化を成果として期待できる。アメリカ研究への革新的アプローチを提示できることを確信する。

●研究概要

■研究計画・方法

今次申請の研究は「研究目的」の説明にあるように、前回の研究結果の報告書に収録されているアメリカに関する論文六本をより学問的に密度の濃いものにし(執筆者の意向による)、新たに5～6本の論文を用意し、行路社による刊行物として刊行する。

新たな5～6本の論文が扱う映画は詳細をこれから詰めるが、現時点では宮川は『大統領の陰謀』『フロスト/ニクソン』と『ヒロシマ/ナガサキ』と『真実の瞬間』(前作の『Good Night, and Good Luck』と組む)、『フォッグ・オヴ・ヲー』を学内で一部上映し、テーマについて講義・討議する。他に移民社会としてのアメリカ、国際社会学としての人口移動の

問題やアメリカ文化・社会の諸相をテーマとしているものを取り上げ、出来る限り学内で上映し、同時に講義する。

本年度中に論文11～12本の出版物にして、成果を世に問う。このような研究成果は大学に於けるアメリカ研究に新しい視点をもたらし、アメリカ研究の間口を広げるものと確信する。そしてそのことはアメリカ研究の場としての大学の存在をより確かなものにする事が期待される。

現在ある研究組織・教育組織と研究設備・施設を活用することで企画の運営・推進が問題なく行なわれることを確信する。この企画に参加する人的資源の前向きの姿勢が確認されていることをここで明記させてもらいたい。

今次の企画が前回の研究成果を更に進化・深化される試金石になるようにしたい。ささやかな研究の積み上げが大きな成果につながることの実例にしたい。

■今回の研究計画を実施するにあたっての準備状況等

この項目に当てはまることの一部は「研究目的・方法」で取り上げたが、今次の研究企画を推し進めることが出来る研究体制(施設・人的資源)、研究施設・設備、図書資料などがおおむね確保されている。人的協力が、責任者を通して、前向きであることが確かめられている。

今次の研究成果は2010年度内で本(地域研究シリーズとしてすでに2冊刊行されている)として行路社から刊行される。成果の内容としては「序章」に責任者による「映画と地域(アメリカ)研究」を置き、[最終章]を用意し、その間に11～12本の論文を収録する。

このような形の成果が一般の人たちの「地域(アメリカ)研究」の理解を深めること、何よりも研究者や学生の「地域(アメリカ)研究」の視野を広くすること、にしすることが大いに期待している。

■研究期間：1年間